



中国色とりどり

松本盛雄



五洲伝播出版社



松本盛雄（まつもと もりお）

は1952年に日本東京生まれ、1976年東京外国語大学中国語科を卒業し、日本外務省に入って外交官の生涯を始めた。前後して外務省アジア局中国課、在中国日本大使館、在香港日本総領事館を経て、現在は外務省アジア大洋州局日中経済室室長をしている。外務省の指の折れるような中国語達人として日本歴任首相と中国政府指導者の通訳を担当してきた。

責任編集者：高 磊

美術デザイン：田 林

ISBN 7-5085-0952-8/I · 86

定價：60 元

中国色とりどり

松本盛雄

江苏工业学院图书馆
藏书章

五洲伝播出版社

2006年8月

图书在版编目 (CIP) 数据

中国万花筒 / (日) 松本盛雄著. —北京: 五洲传播出版社, 2006.8
ISBN 7-5085-0952-8

I. 中...

II. 松...

III. 随笔—作品集—日本—现代—日文

IV. I313.65

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2006) 第 080426 号

中国万花筒

著 者: (日) 松本盛雄

图片供稿: 松本盛雄 中国图片库 国新图库 五洲传播出版社

责任编辑: 高 磊

特约编辑: 田建国

装帧设计: 田 林

设计制作: 北京尚捷时迅文化艺术有限公司

出版发行: 五洲传播出版社 (北京海淀区莲花池东路北小马厂 6 号 邮编: 100038)

电 话: 8610-58891281 (发行部)

网 址: www.cicc.org.cn

承 印 者: 北京画中画印刷有限公司

开 本: 720 × 965mm 1/16

印 张: 13.5

字 数: 90 千

版 次: 2006 年 8 月第 1 版

印 次: 2006 年 8 月第 1 次印刷

书 号: ISBN 7-5085-0952-8/I · 86

定 价: 60 元

ひと味違った中国論

松本さんとのお付き合いが始まってからちょうど二十年くらいになっただろうか。わたしがミシガン大学中国研究センターに客員研究員として留学していた時に、松本さんが視察にこられた際にお会いしたのが最初だったと記憶している。

その後、松本さんは同じミシガン大学に客員研究員として一年間滞在されたが、残念ながらわたしは入れ替わりで帰国してしまった。ただ、そのころからわたしのもとに松本さんの近況報告を書き綴ったコピーレターが届くようになった。

一〜二ヶ月に一度の頻度で、定期的に届けられる便りには、その後、彼が転勤するたびに違った名前が付けられていた。始めは「ミシガン便り」。続いて「ニューヨーク通信」、中国からののは「人民月報」と名付けられていた。あれ以来ずっと欠かさずにコピーレターを出し続けているというのだから感心する。

その彼が現在、香港から送ってくれているのは「山荘便り」。いつも松本さんの独特の感性と味付けが染み込んだ現地情報を送ってくれる。そのやり方で、今度は週刊誌のエッセーが登場したというのを聞いてい

たが、それが一年半続きこの本になったというわけだ。

中国人以上と言われる中国語を駆使して、外交の第一線で三十年近く中国と関わってきた彼が何を書いているのかと思えば、外交秘話でも何でもないよもやま話で、それこそ書名の通り「中国色とりどり」なのだ。しかし、その行間に目を凝らせば、松本さんの体験とそれに裏付けられたひと味違った中国論が浮かび上がってくる。巷に溢れる中国論にやや疲れた人に読んでもらいたい清涼本である。

慶應義塾大学東アジア研究所長 国分良成

目 次

ひと味違った中国論 国分良成	3
--------------------------	---

第一章 わたしが出会った指導者たち	9
-----------------------------	---

- 一 方言と通訳 10
- 二 映画「鄧小平」 12
- 三 改革の立役者・朱鎔基さん 15
- 四 「女強人」呉儀副総理 18
- 五 銭其琛元外交部長の「外交十記」 21
- 六 通訳泣かせのことわざ 23
- 七 東北再建と薄熙来 26
- 八 WTO 加盟と中国 29

第二章 現代中国の政治と社会	33
--------------------------	----

- 一 炭鉱事故と「為人民服務」 34
- 二 テレビドラマ「劉老根」 37
- 三 爆竹と春聯 40
- 四 月餅雑感 41
- 五 北京の「四合院」 44
- 六 国家大劇院は「中体西用」か 47
- 七 中国初の有人宇宙飛行 50
- 八 悪質粉ミルク事件 53

九 満漢全席 56

十 緑の食品 59

第三章 中国各地を訪ねて 63

一 平遙古城 64

二 中国革命の聖地 66

三 美酒か二セ酒か 70

四 九寨溝——失われゆく秘境 72

五 麗江のトンパ文字 75

六 ライチの故郷 78

七 広東・從化温泉 81

八 黄山の牌坊群 84

九 厦門——鼓浪嶼の聴涛 87

十 青島の国際ビール祭り 90

十一 泰山 93

十二 ハルビンの氷祭り 96

十三 敦煌・莫高窟の保存 99

十四 トルファンの交河故城 102

十五 新疆の多様な少数民族 104

第四章 中国色とりどり 109

一 色とりどり 110

二 徐福東渡 112

三 感謝とおわび 115

- 四 陰陽五行と数 117
- 五 問路——道を聞く 120
- 六 「三国志演義」と対中貿易 122
- 七 歴史的な悪宰相・秦檜 126

第五章 誇り高き文化人 129

- 一 愛国画家・黄胄さん 130
- 二 長城コンサート 133
- 三 中国琵琶の名手・楊静さん 135
- 四 王さんの民族博物館 138
- 五 篆刻家・封友文さん 141
- 六 男子十二樂坊 144

第六章 日中友好にかける情熱 147

- 一 熱河古跡 148
- 二 國際茶道丹月流 151
- 三 舞踊劇「大敦煌」 154
- 四 青海省で小学校を造る男 157
- 五 樹人百年 160
- 六 トキの保護 163

第七章 中国で仕事をして 167

- 一 人民大會堂 168
- 二 釣魚台国賓館 170

三 生きた化石キノコ——「肉靈芝」 173

四 エベットと神々の山 176

五 積極的な外資誘致・蘇州新区 179

第八章 中国経済の読み方 183

一 中国のGDP統計をどう読むか 184

二 外貨兌換券と人民元レート 187

三 中国のエネルギーは大丈夫か 190

四 所得格差の現実 193

五 黄河の断流 196

六 山西省の環境汚染改善 199

七 ごみ処理問題とビジネスチャンス 202

八 世紀の大プロジェクト——三峡ダム 204

九 爛尾楼と不動産バブル 207

十 ASEAN とのFTA 構想——最前線の希望と現実 210

整理者後書き 213

第一章 わたしが出会った指導者たち



一 方言と通訳

古い話になるが、いまから三十数年前、大学で中国語を勉強していたころ、通訳のアルバイトを何回かやった。通訳といっても本職とはほど遠いつたないものだったが、よい経験になった。

化学プラントの研修で工場への泊まり込みも含めて三カ月ほど中国人グループの世話係兼通訳をした。上海金山化学コンビナートのエチレン製造設備の据え付けとメンテナンスに関する技術を習得にきた人たちだった。わたしが担当したのは王さん、蔣さん、呉さんの三人で、いずれも上海出身者。若い蔣さんは普通話（標準語）が話せたが、年配の呉さんはなまりが強く、しかも技術関係の言葉が多いので閉口した。通訳をして方言で初めての経験だった。

ただ、当時日本に派遣された中国技術者たちの意気込みには感動した。社会主義体制という公権力に強要されたというより、自分たちが新しい技術を身に付けて国のために役立ちたいという純真で誇り高い気持ちのようにみえた。

ある日、高圧パイプの特殊溶接作業を研修していた呉さんが腕の痛みを訴えた。よく聞いてみると毎日夜遅くまで、重い溶接機械を持ってその日の作業を実際に復習していたというのだ。彼はその年もう六十歳に近かった。

その後、外務省に入ってから、わたしは本職の通訳としてたくさんの要人と接する機会があったが、方言やなまりでは数え切れないくらい目を丸くしてきた。

一九八〇年一月に来日した李強対外貿易部長(当時)は江蘇省常熟市出

身だったが、わりに近い上海の復旦大学で語学研修を受けたわたしでもまったく理解できなかった。方言やなまりだけならまだしも、早口で、しかも小声で話すものだから、中国側の通訳も口元に耳が触れるくらい近寄って聞き耳を立てて大変苦勞していた。

七六年一月に周恩来総理が逝去したあと、総理兼軍事委員会主席に就任した華国鋒さんは、八〇年五月に来日した。羽田空港から迎賓館までの防弾車の中で、ジャンプシートに座った通訳のわたしに「どこで中国語を勉強したのか」などと直接話しかけてきた。中国の指導者は下の者に対する気遣いがあるなと感じた。彼は山西省交城の出身だった。復旦大学で研修していたころ、学生寮で同室だった中国人学生の閻さんが偶然華総理と同じ地方の出身だったため、その言葉遣いには慣れていた。華総理が大平正芳首相(当時)を「太平総理大臣」と呼んでいたのは、そのなまりとともによく覚えている。しかし、間もなく河南省出身の趙紫陽さんに総理の座を譲る。

趙総理の言葉は比較的わかりやすかった。八二年五月に日本を公式訪問するまでも北京で何度かお会いする機会があり、その後も会見などに同席したが、年を経るにつれてひとことひとことが分かりやすくなったように感じた。これは総理という地位のなせる技か、あるいはわたし自身の理解力が向上したためかは定かではない。

通訳にとってなまりや方言は大変だ。しかし、長年やって見て、無責任のようだがなまりのある「普通話」(標準語)はともあれ、方言そのものはわからなくても仕方がないという結論に達した。

上海で「越劇」という、紹興酒で有名な浙江省東部地方の歌劇を鑑賞したとき、うしろに座っていた北方の中国人から「いま何といった？」

と台詞の意味を尋ねられたことがある。中国人でもわからないのだ。とはいえ、実際の通訳の現場では、居直ったり諦観したりしてもいられず、冷や汗を流しながらの仕事になる。

日本人の姓名は日中双方で同じ漢字を使い、しかも発音が違うので困ることが多い。これが地方なまりとなればなおのことだ。

七七年八月から駐日大使をされていた陝西省出身の符浩さんと日本人たちとの間で、大勢の共通の「古い友人」が話題になったことがある。もう記憶がさだかではないが「磯崎」の「磯」という漢字が出てこないで苦労したり、「市村」と「西村」、「渡辺」と「渡部」、「加藤」と「嘉藤」など似通った名前はすいぶん混同したりした。わたしは実際にあったこともない人ばかりだったので訳しながら大変心細かった。

二 映画「鄧小平」

「改革・開放の総設計師」鄧小平氏を題材にした映画「鄧小平」が中国本土で封切られた。丁蔭楠監督によれば、台本だけで九年間かけて五十数本の原稿を作り、検討を重ね、百人を越す関係者にインタビューをしたという。

映画は一九七六年、激動する政治情勢の中、北京の西山にある中央軍事委員会の小さな建物で鄧小平が葉剣英とともに改革・開放の決意をする場面から始まる。

七六年は中国にとって大きな転換の年だ。この年外務省に入ったわたしは、研修生としてアジア局（当時）中国課に配置され、周恩来、朱徳

そして毛沢東という中国革命の指導者らが相次いで世を去るのを目の当たりにした。また唐山で起こった史上最大級の地震では、被災状況の把握、中国人及び中国に駐在する日本人の方々への支援という大変な仕事に携わった。

映画のラストシーンは八十九歳となった鄧小平氏が上海市共産党委員会指導者の案内で楊浦大橋に立ち、眼下の景色を眺めながら、「中国の特色ある社会主義」事業を絶え間なく前進させるようにと希望する場面だ。浦東開発区が現在のように摩天楼が立ち並ぶ、外資が先を競って進出してくる場所になったのも鄧小平氏の九二年の南巡講話が決定的な役割を果たした。この二十年余りはまさに、中国が改革・開放政策のもと、多くの問題に直面しながら進んできた時期といえる。



映画「鄧小平」の主演者盧奇

数年前に丁監督に会ったのは、偶然だった。映画関係の仕事をしている知人の馬さんが「北京郊外に珍しいレストランがあるので一緒にいってみよう」というので出かけたところ、丁監督がたまたま来ていて、馬さんが仕事の関係でよく知った仲だったことから、あいさつした次第だ。

ちょうど、鄧小平役の俳優、廬奇さんも一緒だったので、しばらくお茶を飲みながら雑談したが、彼が興にのって少し演技のまねをしてくれた。特徴のある四川なまりの発音や癖などをよくとらえていて思わずおかしくなった。まだ四十代の若い俳優だが、物腰から話しぶりまで往時の鄧小平氏を彷彿とさせる。「ここまでできるようになるには、ずいぶんと訓練を積んだのだらうな」と感じた。周りにいた客も珍しそうにこちらを見つめていた。

二〇〇一年に撮影クルーが鄧小平の旧居を訪れ、晩年のシーンを撮影することになったとき、夫人や娘たちが細かな意見や注文をだし、満足いくまで撮影が続けられたという。例えば鄧小平は「白い靴下ははいたことがない」とか「歩くときは手のひらをうしろに向けて」とか。さらに、九〇歳の老人を演じるときにはメーキャップが大変で七時間にも及んだという

わたし自身にとって、最も印象に残っている鄧小平は、八一年、いわゆる「プラント・キャンセル問題」の処理のために日本政府が派遣した大来佐武郎顧問（当時）とともに訪中し、会見したときのことだ。七十年代末から中国が急速なプラント輸入により近代化を進めようとした結果、中国はまもなく厳しい外貨不足に直面し、八十年代に入りその見直しを迫られた。日本企業の受注した総額数十億ドルにのぼるプラント輸